



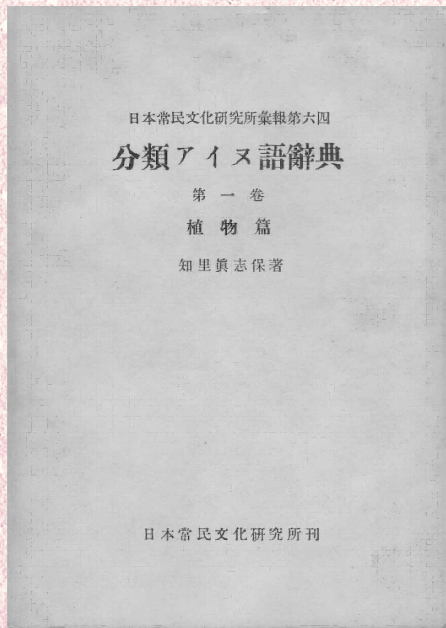
▲北海道郷土研究会での風景。1番左側が真志保。連絡場所となった北海道立図書館（江別市）の郷土資料室は『浪人長屋』と呼ばれ、考古学や民俗学など各会員の専門を通じて互いを刺激し合いました。

この時期の真志保は精力的に活動し、多くの文化人との懇親を深めていきます。翌年には、北海道郷土研究会理事に就任し、ここでは、アイヌ語講習会の講師も務め、さらに『地名アイヌ語小辞典』の元になった『こっくり會誌』に、真志保は『狩人ものがたり』という艶笑談を書いています。厳しいイメージのある真志保ですが、大学での授業は他学科の学生も受講するほど人気が高かったようです。それは真志保の術が優れていただけでなく、『狩人』のようにユニークな話を織り交ぜた講義だったからかもしれません。



▲1952（昭和27）年、43歳。北大遺跡発掘現場での真志保（中央前）。おしゃれな真志保らしく、シャツに蝶ネクタイ姿をしています。

▶『分類アイヌ語辞典』。真志保のアイヌ語研究の集大成と言えます。全5巻の予定で、植物編、人間編、そして没後には動物編が出版されましたが、残念ながら残り2冊は未完となりました。



ライフワークの出版

1953（昭和28）年、アイヌ語研究を代表する『分類アイヌ語辞典 第1巻 植物篇』をついに出版します。

この辞典は東大卒業時からの構想で、正しいアイヌ語を残すためには百科事典のようにあらゆる分野の知識が必要であり、その実現には一生を費やしました。

南部忠との出会い

1954（昭和29）年の冬、真志保を献身的に治療した医師・南部忠との交友がはじまります。持病の心臓発作が悪化していたため、自宅まで毎日のように自転車で往診に来てもらいました。

自宅には、時々アイヌ語地名研究者である山田秀三が訪問しており、真志保は議論に熱が入ると『お前は、邪魔だから帰れ！』と言いきり、南部を帰したことがしばしばありました。アイヌ語のことになると一変し、厳しい表情を見せたそうです。

研究の評価と姿勢

1955（昭和30）年には、朝日賞を受賞します。これまでに出版された2冊の『分類アイヌ語辞典』と、刊行間近となった動物編の功績が評価された受賞でした。

翌年に出版した『アイヌ語入門』では、文中で金田一京助を含む多くの研究者に学問的批判をしています。そこには、間違ったアイヌ語を正そうとする真志保の学問的・民族的姿勢がありました。